

テーブルスペース

日経アーキテクチャコンペ [最優秀賞・立原道造賞]

松田隆志



テーブルスペースの全景

先日、今回で6回目を迎える日経アーキテクチャコンペが開かれました。テーマは「リバーシブル・スペース」です。洋服を裏返して着るのを「リバーシブル・ウェア」といいます。では、建築で「裏返す」ことは、どのようにして可能となるのでしょうか？ 日常的に接している空間を「リバーシブル」にすることで、本来建築空間も持っている「自由さ」を取り戻すような提案をしてください、といった内容でした。

私の提案は、326点の一般応募の中から建築家の小嶋一浩氏の審査で最優秀賞に選ばれ、また同時に20代の優れた入選者に贈られる立原道造賞にも選ばれました。

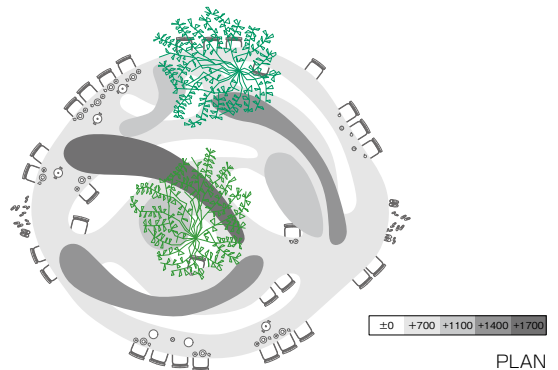
その提案は、テーブルという従来は家具としての機能をもつ存在を「リバーシブル」することで、さまざまなシーンを生み出す建築空間であるテーブルスペースを作るといふものです。さまざまなシーンとは、歩くことができる場所であったり、見晴らしのいい場所であったり、寝ることができる場所であったり……。建築の提案というよりも、場所を作るといふか、楽しい情景が生まれるように考えた作品です。また、それに伴い表現を徹底的に抽象化しました。それによって、第三者にこのテーブルスペースを体験した状態を想像してもらいやすくし、楽しさを伝えるということを試みました。

テーブルスペースは、都市のオープンスペースや小学校の校庭など、異なる世代で同時に囲まれる風景が生まれる場所に置くことを想像しています。老若男女を問わず、多くの人々がこの建築を囲んだときに、存在する場所、周辺の環境を含めてより魅力的な風景が生み出されることを期待しています。

また、完成した作品や「リバーシブル」ということを

通して、物事の裏と表とを考えるようになりました。建築に限らず、政治、飲食店、会社、モノや人に至るまで、この世の中に存在するあらゆる物事には裏と表があると思います。しかし、一般的には裏と表の両方もがポジティブなイメージをもっているものは、少ないのではないのでしょうか。さらには裏と表がないことが、善いとされている風潮もあります。私は裏には裏の魅力が、表には表の魅力がそれぞれ存在し、ときには裏返すことでさらに魅力的になるということが、素晴らしいことだと考えています。このコンペを通して、世の中で特異な性質をもつ「リバーシブル・ウェア」のような存在に興味が生まれました。

なお、コンペの提出案の詳細については、『日経アーキテクチャ』（2008年12月22日号）またはホームページをご覧ください。また同時に、3月22日まで立原道造記念館にて、作品の展示が行われますので、興味のある方はそちらもご覧ください。（まつだたかし・今村研 M1）



歩くことができる場所



見晴らしのいい場所



寝ることができる場所